
サドで邪悪な召喚獣 i f ~ another sky ~

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サドで邪悪な召喚獣if\another sky\

【Nコード】

N2421Y

【作者名】

まあ

【あらすじ】

サドで邪悪な召喚獣のifシリーズです。今回はヒロインを島田美波に置かせていただきました。

美波が日本に帰る数日前に理音と美波はドイツの空の下で出会います。

その出会いの中で生まれた淡い恋心は別々の空の下でどのように成長していくのでしょうか？

第1問

(……来週には日本か？ 日本語なんてわからないし)

公園のベンチで1人の少女『島田美波』は空を見上げて小さなため息を吐く。

(……日本になんか行きたくない。でも、葉月が泣いちゃうし)

美波は両親の仕事の関係で幼い日からドイツで暮らしており、両親の仕事で日本に戻る事になったのだが暮らし慣れたドイツを離れたくない思いが強いようでもう1度、ため息を吐いた時、

「下がれ！！ この子がどうなっても良いのか！！」

「へ？ な、何？ 何なの？」

「騒ぐんじゃない！ 死にたいのか！！」

ナイフを片手に周りを警戒する男性が美波をつかみ、彼女の首筋にナイフの刃を当てると美波はいきなりの事で声をあげるが男性は興奮しているようで美波を怒鳴り散らす。

「……まったく、バカな事をしていないで、ばばあから奪った荷物を返して、そいつを解放しろ。今なら許して死なない程度に痛めつけるだけで許してやる」

「だ、黙れ！！ 近づくんじゃねえよ！！ ガキのくせに俺をバカにしやがって」

「……ばばあを吹っ飛ばして荷物を盗んだバカをバカにして何が悪い。道徳も知らんバカが偉そうに言うな。へどが出る」

「ちょ、ちよつと、あんた、何、挑発してるのよ!? 見てよ。今、女の子がピンチなのよ」

その時、1人の無表情な少年がこちらに近づいてくると男性は少年にナイフを向けるが少年の表情は変わる事も美波の事など気にかけている様子もなく美波は声をあげると、

「ん? すまん。胸がないから、女だと気付かなかった」

「何ですって!! ちよつと放しなさいよ!! あの男、私が気にしている事を!!」

「さ、騒ぐな!?!」

少年は気にする事ないばかりか美波の気になっている少し周りの同じ年の少女達より寂しい胸をバカにされた事に少年を怒鳴りつけると男性は声を上げた美波の様子に驚いた時、

「……死ね」

「な、何なの!?!」

少年の腕にはなぜか打ち上げ花火が握られており、美波を人質に取っていた男性の腕を撃ち抜いた後に花火は美波の身体に当たる事なく男性を撃ち抜いて行き、男性の手から美波が放れる。

「115」

「へ!？」

少年は男性の手から美波が放れた瞬間を見逃す事はなく、美波の手を握りしめると美波を引き寄せ、美波は少年の腕の中にすっぽりと収まると、

(……な、何?)

美波は自分を抱きしめている少年の顔を見上げると少年の顔は奇麗に整っており、悪態を吐きながらも自分を助けてくれた少年の体温に自分の体温があがって行くのを感じる。

『ご協力ありがとうございました!？ ま、前田博士!？』

「前田博士?」

「ん? どうかしたか」

騒ぎの原因になっていた男性は駆け付けてきた数名の警察官に取り押さえられ、警察官の1人が少年に頭を下げようとした時、少年の顔を見て驚きの声を上げると美波は首を傾げながら少年の顔をもう1度見上げるが少年は警察官が驚いている意味がわからないように首を傾げると、

「俺の事は気にしないで良い……悪いな。ケガはないか?」

「ちょ、ちよっと、何よ?」

少年は美波の顔を覗き込むと彼女にケガはないかと確認し始め、美波は目の前に映る少年の顔を見て、少年から視線を逸らす。

第2問

「小さいが擦り傷が付いてるか」

「ちょ、ちよつと、近い!? 近いわよ!？」

「動くな……これで良いな」

少年は美波の顔を覗き込むと頬には小さな擦り傷があったようで懐から小さな薬瓶を取り出すと美波の頬に薬を塗り、絆創膏を貼りつける。

「あ、ありがとう」

「ん? 気にするな。巻き込んだのは俺じゃないな……文句はあの窃盗犯に言え」

「言えるわけがないでしょ……あれ? あんたって日本人?」

美波は少年にお礼を言うと少年は美波に自分が頭を下げる理由はないと思つたようで美波に警察官に捕まっている男性を指差すが美波は少年の様子に大きく肩を落とした時にドイツ語で会話をしていたため、気づくのが遅れたが少年が日本人だと言う事に気づき、

「ああ。そつだ。前田理音だ」

「わ、私は島田美波よ」

少年は自分の名前を『前田理音』と名乗ると美波は慌てて自分の名

前を名乗ると、

「あんだ、日本人なのになんでドイツにいるの？ 両親の仕事の關係？」

「いや、今は学会で新技術発表があつてな。1週間程度ドイツに滞在する予定だ」

「学会？ 新技術発表？」

美波は理音がドイツにいる理由を聞くが理音の口から出る言葉は明らかに同年代の少年から出る言葉ではなく、美波は首を傾げる。

「説明が面倒だな。これで良いか？」

「名刺？ ……えーと、どう言う事？ あんだ、私と同じ年くらいでしょ？」

「ん？ 簡単に説明すると俺は天才と言うものに分類されるわけだ。理音は説明が面倒なように懐から名刺を取り出して美波に渡すとその名刺には少年がアメリカの大きな研究所の研究員である事を示しており、美波は理音の経歴が信じられないように目を白黒させるが理音は気にする事なく、自分を天才だと言い切り、

「天才？ あんだが？」

「ああ。世間一般ではそう言われるらしい。別に興味などないがな」

美波は理音の顔と名刺を交互に見比べ、その行動は理音の事を知っ

ている人間から見るとかなり失礼なのだが理音は気にする事はなく、

「悪いな。俺はそろそろ、行かないといけないんだが」

「あ、あのさ。ちょっと待って。あんたって天才なのよね？ 日本語ってわかる？」

「……何を言っているんだ？ 美波だったか、お前も日本人だろ」

理音は時間を確認すると時間がないのか歩き出そうとするが、美波は何かあるようで理音の腕をつかみ、日本語を教えて欲しいと言出し、理音は美波の言葉に意味がわからないようで首を傾げる。

「そ、そうなんですけど、私、小さい頃からドイツに住んでるから日本語ってわからないのよ。それなのに来週には日本に帰る事になって、日本語がわからないし」

「そう言う事か？ ……悪いが何を当たってくれ。俺はそんなにヒマじゃない」

「ちょっと待ってよ。お願いよ」

美波は今の自分の状況を放すと理音は状況を理解したようだが自分に彼女の相手をする理由がないため歩き出そうとするが美波は必至なようで理音の腕に抱きつき、

「……しつこいぞ」

「良いでしょ。天才なんだから、それくらい手伝ってよ」

理音は美波を引きずったまま歩きます。

第3問

「……ここまで付いてくるとはお前はバカか？」

「う、うっさいわよ。だいたい、あんたが私に大人しく日本語を教えてくれれば良いわけでしょ」

結局、美波は理音の泊まっているホテルまで付いてくると理音は根負けしたようで大きいため息を吐いて美波を自分の借りている部屋まで招きいれるが美波は理音の態度に文句があるようで頬を膨らませ、

「まったく、日本語を教えろと言うのにまったくの無計画なのか？
だいたい、1週間程度で覚えられるほど、お前は賢いのか？」

「それを考えるのが天才のあんたでしょ」

「……まったく、簡単に言ってくれろ」

理音は美波の様子ので眉間にしわを寄せて1週間程度で何ができるのか聞くが美波は頬を膨らませたままである上に特に何も考えていないようで無責任に理音で任せるつもりのように理音はその様子に大きいため息を吐く。

「だいたい、日本語なら両親に教わるのが普通だろ。それも普通に考えて会ったばかりの人間の後にホイホイ付いてくる人間がどこにいる？」

「ちょ、ちょっと、何する気よ!？」

理音は美波の行動は常識から外れていると彼女との距離を詰め、美波は理音に襲われると思ったようで理音を押しつけようと手を伸ばすが、

「そんな貧相なものに欲情などするか」

「な、何よ！！ その態度は」

理音は美波の手を交わして彼女から離れると美波の胸ではそんな気分にはならないとため息を吐き、美波は気にしている事をバカにされたため、理音を怒鳴りつけるが、

「……落ち着け。だいたい、文句を言いたいのはこっちだ。俺はお前を助けてもなんの得もないんだぞ。だいたい、さっきも言ったが日本語なら両親に習えと言うか日本に戻る事も考えられる仕事だったんだろ。それを怠ったのはお前の両親だろ。なぜ、俺がお前の両親の尻拭いをしないといけない」

「そうかも知れないけど」

「まったく」

「ダ、ダメよ。私だっていろいろと、理、理音は確かにキレイな顔をしてるし、助けてくれた時はちよつとカッコイイかも？ とか思っただけど、やっぱり、会ったばかりなわけだし」

理音は落ち着いた様子でもう1度、美波に両親に日本語を習うように言うが美波は何かあるのか首を横に振り、理音はため息を吐くと彼女の頬に手を伸ばし、美波は理音の先ほどの行動もあるのか顔を

真つ赤にしておかしな事はしないでと言つ。

「……だから、何度も言ってるだろ。おかしな勘違いをするな。美波、お前の日本に帰った時の住所を教える。必要なものができたら送ってやる」

「う、うん。ありがとう。えーと、ダメよ。私、漢字が書けないのよ」

理音は何か思いついたようで美波に日本に帰った時の住所を聞くと美波は理音の言葉に大きく頷くと日本の住所を書こうとするが住所を日本語で書けない事に気づき、

「……お前、本当に頭は大丈夫か？」

「な、何よ？」

「携帯は持っているか？ メールアドレスでも良い。わかったら、このアドレスに住所を送信しろ。必要なものができたら、送ってやる」

「う、うん。そうする。ゴメンね。迷惑をかけて」

「そう思うなら、熱くなるな。頭に血が昇っている間は間違った事しかできなくなるぞ」

理音は美波の様子に完全に呆れており、美波は理音の様子に流石に悪い事をしている事に気付き始めているようで申し訳なさそうな表情をして謝り、理音はそんな美波の様子に表情を変える事なく言う。

第4問

「理音、こんなところで何してるの？」

「ん？ 美波か？ ……なんだ？ この小さな生物は？」

美波は理音と出会った翌日に、彼と出会った公園を妹の『島田葉月』の手を引いて散歩していると理音がベンチに座り、空を眺めているのを見つけて声をかける。

「小さな生物じゃないです。葉月は葉月です」

「……そうか」

「理音、この子は私の妹の葉月よ」

葉月は理音に小さな生物と呼ばれた事が不服なように頬を膨らませるが理音は気にする事なく空を眺めており、美波はそんな理音の様子に苦笑いを浮かべると理音に葉月を紹介し、

「お姉ちゃん、このお兄ちゃんはお姉ちゃんの彼氏さんですか？」

「は、葉月！？ いきなり、何を知ってるのよ!？」

葉月は理音の隣に座って、理音の顔を覗き込むと葉月は美波に理音は彼氏かと聞くと美波は葉月の言葉に驚きの声をあげる。

「……小さな生物、何をおかしな事を言っているんだ」

「葉月です」

「……葉月、おかしい事を言うな。現状で言えば、お前の姉は俺の依頼人であるだけだ。依頼料の交渉はまだだがな」

理音は葉月のおかしな勘違いを否定すると理音は美波から1つの依頼を受けているだけだと話し、

「そうなんですか」

「……」

葉月は少しだけつまらなさそうな表情をする隣で美波は少しだけ理音が自分の事を何とも思っていない事にショックを受けているようであり、

「それで、こんなところで何をしてるの？」

「ん？ ああ。美波、お前を待っていたんだ。これを渡そうと思っ
てな」

「何これ？ USB？」

葉月は自分が理音の言葉にショックを受けるはずはないと大きく首を振ると理音に公園にいる意味を聞き、理音は欠伸をした後、ポケットからUSBメモリーを取り出して美波に渡すが美波は意味がわからないように首を傾げる。

「簡単な独和と和独の辞書のようなものだ。一般的な会話で使うものなら、それでしばらく勉強している」

「これ、私のために作ってくれたの？」

「……そう言う約束だろ。まったく、忙しいなか、作ってやったんだ。無駄にするなよ」

「う、うん。ありがとう」

理音はUSBメモリーの中にあるものを説明するとあまり寝ていなかったのか欠伸をしながらベンチから立ち上がり、美波は愛想こせないが自分のわがままを聞いてくれる理音の事が気になるようであらちらと理音を見ながら礼を言い、

「それじゃあ、俺はホテルに帰るぞ」

「ひよ、ひよっとしてこれを渡すために待っていてくれたの？」

「……バカな事を言うな。散歩のついでだ。仮にあったら一手間減るだろ」

「お兄さん、お腹減ってるですか？」

理音はホテルに帰ろうとすると美波は理音がこのためだけにいつくかわからない自分を待っていてくれたと思ったようであり、顔を赤らめるが理音にはそんな気は全くなく、美波にバカを見るような視線を向けた時、理音の腹の虫が鳴き、葉月は理音の様子にくすくすと笑う。

「……ああ。そう言えば、昨日から何も食ってなかったな」

「き、昨日って、理音、あんだ、何をしてるのよ？」

「ん？ 気にするな。こんなのはいつもの事だ。何かに集中し始めると睡眠も食事も身体も脳も忘れる」

理音は表情を変える事なく、食事をとっていないかった事を白状すると美波は慌てるが理音にとっては日常茶飯事の事のようにであり、

「そんな大切なものを忘れるわけがないでしょ。ちょっと、来なさい。葉月、帰るわよ」

「ハイです。お兄さんも行くです」

「待て。どうして、そうなる？」

「良いから、来なさい。これのお礼とでも思っっていなさいよ」

美波は理音の腕をつかむと理音を引きずって歩きだし、葉月は理音と美波の様子に何かを感じているのか嬉しそうな表情で理音の手を握り、美波と葉月は理音を自分達の家に連れて行く。

第5問

「……お前は何がしたいんだ？」

「見ればわかるでしょ。お昼ご飯を作るのよ。あんたも食べていきなさい」

理音は美波の家まで引きずられて行くと美波はエプロンをつけて理音の分も昼食を作るようだが、

「……美波、昨日も言ったが、お前、バカだろ」

「な、何よ。それは!!」

「……包丁を向けるな」

「お姉ちゃん、危ないです」

理音は美波をまたバカ扱いし、美波は理音の言葉が頭にきたのか包丁を理音の向ける。

「昨日も言ったが、あつたばかりの人間を信用するな。昨日は俺の宿泊先のホテルに今日は後数日で引越すとは言え、自宅に引き込むな。俺がおかしな趣味を持っていたら、お前も葉月もそこで終わりだ」

「あ、あんたはそんな事は絶対にしない」

理音は表情を変える事なく、自分が犯罪者だった場合の事を考える

と理音の様子は冷たく寒気のするように変わって行き、美波は理音の様子に息を飲みながらも美波は理音は自分や葉月を傷つける事はないと言い切るが、

「なぜだ？ 少なからず、俺は自分を人殺しだと認識してるぞ」

「な、何を言ってるのよ？」

理音は表情を変える事なく、自分を『人殺し』だと言い切り、美波は理音の言いたい事が理解できないようである。

「お兄さん、どうして、そんな嘘を吐くですか？」

「別に嘘ではないな。俺は人殺しだ。助ける事もしたが助ける事が出来なかった命ものも多くあるからな」

しかし、葉月は気にする事なく、理音が人殺しだと言う意味を尋ねると理音の無表情な顔は少しだけ悲しそうに歪むが直ぐに無表情に戻り、

「助けられなかった命？」

「何だ？ 昨日の名刺にも書いていたはずだ。専攻は薬学だが外科的手術だっけで行く。だいたい、今回の学会もそのためにきているんだ」

「お兄さん、お医者さんなんですか？ 凄いです。葉月、感激です」

美波は理音の口から出た言葉に頭が処理しきれないようできょとんとした表情をすると理音は自分は医療従事者だと話し、葉月は理音

の手を取って楽しそうに笑っている。

「そ、そうなら、おかしい方をしないですよ」

「おかしい言い方だとしても事実だ。俺は人殺しでお前の行動は迂闊だと言う事くらいは頭に入れておけ。お前が『家族の死』にまで責任を持てるなら何も言わないがな。最近は日本も治安は悪いようだしな。少しは考えて動け」

美波は状況が理解出来たようで安心したのかゆっくりと息を吐きだすと理音は美波の迂闊な行動にため息を吐き、もう少し考えて行動するように言い、

「わ、わかったわよ。反省するわ」

「そうしろ」

美波は理音の言葉に頷くと理音は短く返事をする。

「私はご飯を作るから居間で待ってて、引越しの準備をしているから、少し荒れてるけど、葉月、理音を案内して」

「はいです。お兄さん、行くです」

「ん？ 気にするな。俺の部屋に比べると何でもない」

「……あんだ、どんな荒れたところに住んでるのよ」

美波は葉月に理音を居間に連れて行くように言い、葉月は理音の手を握って理音を引っ張って歩きだし、理音は葉月の後を付いて歩い

て行く。

第6問

「葉月、寝ちやっただの？」

理音は昼食をぐちそうになっただ後に葉月の相手していたのだが、葉月は理音と一緒にいるのが楽しかったのか理音の膝の上で小さな寝息を立て始めている。

「……なんだ？」

「葉月が、理音に懐いたのが、ちょっと意外だっただけよ。ねえ、あんたって、弟か妹っているの？」

美波は葉月の様子にくすりと笑うと無表情ながらも、葉月の手をしっかりとしてくれていた理音に弟か妹がいまいかと聞くと、

「……年の離れた弟はいるが、3年会ってないからな。俺の顔も覚えてないだろ」

「3年？」

「小学校の卒業を同時に留学と同時に研究所に入ったからな。日本にはそれ以来、戻ってもいない」

理音は弟がいるがまったく会っていないと言うと小さな寝息を立てている葉月の頭を撫で、

「そっか。弟くんは寂しい思いをしてるかもね」

「さあな。俺がいない方がいいだろうから、そんな事は思っ
てはな
いだろう」

美波は理音の弟は寂しい思いをしているかも知れないと言
うが理音
は首を振る。

「そ、そんな事はないわよ。きっとさびしいはずよ。あ
んただっ
て年中無休なわけじゃないでしょ。時間があつたら、それ
こそ、日
本でだって学会とかあるんじゃないの？ その時にでも帰
つたら……
理音、ごめん」

「別に気にする必要はない。お前には関係ない事だ」

「関係ない？ そ、そうよね」

美波は理音に日本に帰ってやるように言うが、その時に理
音の表情
が歪んだ事に気づき、彼に謝ると理音は感情的で短絡的
に動く美波に話しても意味がないと思っ
ているようであり、理音は美波には関
係ないと言い切ると美波の胸は小さく痛むが彼女自身も
この痛みが何か気付いていないようであり、慌てて頷くと、

「美波、葉月はどこに運んだら良いんだ？ 俺はそろそろ
出ないと
学会に間に合わなくなるんだが」

「へ？ ちょ、ちょっと、学会って今日なの！？」

「ああ。それで、どうしたら良いんだ？」

理音は膝の上の葉月を抱きかかえると美波に葉月を起こさ
ずにベッ
トまで運びたいようである。

「ちょ、ちよつと、そんなに落ち着いていて時間に間に合うの？」

「これ以上、遅れると間に合わないと言っているだろ。まったく、美波、お前は人の話を聞く気はあるのか？」

美波は理音に時間がない事を聞いて慌てるが理音本人は彼女とは対照的に妙に落ち着いており、

「えーと、こつちに来て、葉月の部屋に案内するから」

「ああ」

美波は理音を遅刻させるわけにはいかないため、慌てて葉月の部屋に理音を案内して理音は葉月をベッドに下そうとするが葉月はしっかりと理音の上着のシャツをつかんでいる。

「……困ったな」

「葉月、手を放してよ」

理音は力づくで葉月の手を話すわけにもいかないと思っているようで眉間にしわを寄せると美波は理音に時間がない事もあり、慌てているが、

「仕方ない。取りにくる暇はないから、捨ててくれ」

「え！？ ちよつと、理音！？」

「悪いな。時間がないから、帰らせて貰う」

理音はTシャツの上にシャツを着ているため、シャツから腕を抜くと急いで帰る準備をして玄関に歩いて行き、美波は慌てて理音を見送るために玄関まで追いかけて行くと、

「本当に間に合うのよね？」

「ああ。時間がないから、行くぞ」

「う、うん。あ、あのさ。理音！？　ちょ、ちょっと、何するのよ！？」

理音が帰ろうとする姿に美波は何かあるのか理音を呼び止めた時、彼女の頭に理音は手を伸ばし、

「例え、引越したとしても何も変わらない。お前にはドイツ（ここ）にいたと言う事実があつて、仲間はずいいるんだ。1人だと思ふ必要はない」

「そ、そうよね」

「な、何だ？」

「いや、あんたがそんな事を言ってくれるなんて、思わなかったから」

美波は理音が自分の事を心配してくれている事に意外そうな表情をする。

「そうか……いや、ただ、今のお前を見ているとあの日、俺が帰る

場所を捨てた時にあいつが言ってくれた言葉を思い出したただけだ」

「あいつ?」

「……そうだな。一事で表すと安っぽい気もするが『親友』だと思いたい。あいつの言葉があったから、『俺達はまだ壊れないでいられる』んだ」

理音は日本を出た日の事を思い出したようで柔らかい笑みを浮かべると美波の胸は理音の笑みを見て小さく脈打ち、彼女の顔は真っ赤に染まって行くが、

「じゃあな。また、どこかで」

「う、うん。理音、またね」

理音は美波の変化に気づく事なく駆け出して行き、美波は理音の背中中に小さな声で一方的に再会を誓う。

第7問

「シマダミナミです。よろしくお願いします。マダ、上手くニホン語が話せません」

『島田美波さんはドイツからの帰国子女だそうです。日本にはつい最近、帰国したばかりなので、皆さん、色々と助けてあげてください』

(……私、何かした?)

美波はドイツから帰ってくると高校時代を3年間過ごす事になる文月学園に入学してクラスでの自己紹介をしているなか、クラスメイト達は美波の自己紹介にくすくすと笑っている。

『島田さん、大丈夫ですよ。漢字は徐々に覚えて行けば良いわけですよ』

「よろしくお願いします」

美波は担任教師の言葉で黒板に目を移すとそこで自分の名前を『島田美波』と書いてある事に気づき、慌ててローマ字で『Minami Simada』と書き直すと笑うだけで自分が間違えていた事を指摘してくれないクラスメイト達に不信感を覚えながらも何も言えずに自分の席に戻り、

(……お父さんが言っていた日本と全然違う。本当に日本って大丈夫なの? 理音は日本も安全じゃないって話してたし、本当にやっていけるのかな?)

席に座り、クラスメートの自己紹介を聞いていると日本に戻ってきた事に不安しか覚えないようなクラスメート達が多く、彼女は眉間にしわを寄せているなか、担任は連絡事項を話すと教室を出て行き、その瞬間に帰国子女と言う特殊な人間である美波に興味本位で声をかけてくる。

（話すのが早すぎて何を言ってるか。わからない。どうしよう？

……あっ！？　そうだ。理音から、送られてきたものを使ったら良いんだ）

美波はクラスメート達の質問攻めにどうして良いかわからずに戸惑っているとき、理音から送られてきたものをカバンの中に入れていた事を思い出し、カバンを漁り始めるとクラスメート達は美波の行動に首を傾げるが、

「すみません。もう少し、ゆっくり話してください。聞きとれないです」

美波は小さなディスプレイと入力ボードが付いた機械をカバンから取り出すとドイツ語で入力するとディスプレイには日本語で美波の言いた事が表示され、クラスメート達は見慣れない機械に驚きの声をあげ、

『島田さん、これって何？　……速い？』

「ちょっと待ってください。確か、こうすると……」

理音の作った機械の事に興味に移り、1人の女子生徒が美波に話す速さの事を聞くと美波は理音の翻訳機をいじると日本語入力とディ

スプレイに表示される。

『これ。凄いものだよね。どうしたの？』

「友達が作ってくれました。言葉が伝わらないと大変だって、言葉は徐々に覚えて行けと言って」

クラスメート達は翻訳機を介して美波に質問を始めるが美波は友達と言ったのだが美波の様子に何かを感じたようでニヤニヤと笑うと、

『ひょっとして、彼氏？』

「ち、違います!？」

『ほう。片思い中か？』

美波と理音との関係を聞くと美波は顔を真っ赤にして否定するがその様子クラスメート達は生温かい目で見たり、悔しそうな表情をしている生徒達もいる。

『その子ってかっこいいの？ 写真とかないの？』

「……それは言わないとダメなの？」

『良いじゃない。私達はその子と会う事もないわけだし』

クラスメート達の興味は次は理音に移行し、美波は完全に逃げ場所を失う布陣になっており、

「かっこいいと思うけど……性格はちょっと……かなり悪い」

『クール系か？ 名前は』

「前田理音」

『前田理音？ 何、日本人なの？』

美波は無表情で悪態を吐く理音の顔を思い出して小さくため息を吐くと美波から見える同年代の恋愛に女子生徒達は色めき立っており、理音の名前を呼んだ時、

「前田理音？ って、島田さん、リオに会ったの！！」

なぜか女子のセーラ服をきたバカそうな少年『吉井明久』が人波を割って美波に駆け寄ってくる。

第8問

『吉井に前田理音？ 待てよ。前田理音って、昔、噂になった父親を殺したって奴じゃ！？』

「お前、何を知らないくせにおかしな事を言うな！！ リオはおじさんを殺してなんていない。あれは事故だったんだ！！」

美波へ駆け寄ってくる明久の様子に1人の男子生徒は何かを思い出したように理音を『父親殺し』と言うと明久は直ぐに方向をかえ、その男子生徒の胸倉をつかむ。

「あ、あの。何があつたんですか？」

『……………』

美波は目の前のやり取りに何があつたかわからないようでそばにいた生徒に聞くが理音の父親殺しと噂を聞いてしまった生徒達は美波から少し離れてしまい、

『わかつたから、放せよ』

「……………」

男子生徒は明久の様子にこれ以上は何も言わないと手をあげると明久は彼を睨みつけたまま手を放し、

「えーと……………」

美波の前にまで行くと少し悩んだ後、

「吉井明久です。島田さんに聞きたい事があるんだ。リオはあいつは元気にしてた？」

「元気だったと思う。でも、会ったのはドイツから引越してくる少し前」

理音の様子を聞きたいようで美波に聞き、美波は理音と最後に会った日の事を思い出しながら答え、

「そっか。元気にしてるんだ」

「……ヨシい？」

明久は美波の返答を聞いて何かを噛みしめるように呟くと彼の瞳にはうっすらと涙が浮かび、美波は明久の顔を覗き込む。

「う、ごめん。リオが元気ならそれで良いんだ」

「まって、ヨシい……」

明久は泣いている姿を見せられないと思ったようでその場から離れようとするが美波は明久が理音が別れ際で言っていた『理音の親友』だと理解したようで彼の手をつかむと、

「タトえ、ヒッコしたトしてもナニもカワらない。おマエにはココにいたとイウジジつがあつて、ナカまはかなラずいるンダ。1人ダと思うヒツようはない……リオがドイツでワタしにいつてクレたコトバ。シンゆうがくれタイセツなコトバって」

片言だが美波は一生懸命に理音が明久から貰ったであろう、理音の中にある掛替えのない言葉を明久に伝えると明久はその言葉にやはり心当たりがあったようで彼の瞳からは大粒の涙が流れ始め、

「ヨシい？」

「そっか。リオは覚えていてくれたんだ」

美波は明久の様子に戸惑いながらも彼に声をかけ、明久はセーラ服で自分の涙を拭う。

「島田さん、リオの事をもっと教えてくれない？ 連絡先もわかるなら、教えてほしいんだ」

「えーと、これを送ってきてくれた時に連絡先が書いてあったから、家に帰ればわかるけど、明日で良いかな？」

「ありがとう。そうだ。ちょっと、僕、姫路さんにもリオの事を話してこなきゃ」

明久は理音と連絡が取れなくなっていたのか美波に今の理音の連絡先がわからないかと聞くと美波は戸惑いながらも明久の様子に大きく頷くと明久は自分以外にも理音の事を心配している友人がいるように教室を出て行き、

(……あれが理音の親友？ ……何で、女子の制服を着てたんだろっ?)

美波は理音が言っていた人間と明久の姿が合致しないように首を傾

げながらも、

（そっか。この街は理音の故郷なんだ。電話してみても良いかな？
街の事を知りたいとか言えば良いわけだし）

理音へ連絡を取る口実を見つけたためか、少しだけ嬉しそうに笑う
が『父親殺し』の話聞いた生徒達は美波に関わって良いものか考
えているようで彼女から少し距離を取っている。

第9問

「……誰だ？」

「理音、私、美波」

美波は明久の事を報告する口実を手に入れたため、理音に電話をかけると電話の先からは抑揚もなく機嫌が良いのか悪いのかわからない理音の声が聞こえ、美波は理音の声に胸が『とくん』と音を立てるがそれを押さえるように慌てて返事をする。

「ん？ 何の用だ？ 送ったものに不都合でもあったか？」

「そ、そんな事ないよ。凄く役に立ってる。今日もクラスの人達ときちんと話す事が出来たし」

理音は美波からの電話に送った翻訳機が上手く作動しなかったと考えたようだが美波は翻訳機は役に立ったため、直ぐに否定をし、

「ん？ それなら、何の用だ？」

「う、うんとね。私が引越した場所って理音の育った街だったんだね」

「そんな事か？ それだけなら、切るぞ」

理音は美波の用件が理解できないため、電話の先で首を傾げると美波は理音に街の事を聞きたいようだが理音は興味がなさそうに電話を切ろうとする。

「ちょ、ちょっと待ってよ!? な、何で、そんな反応なのよ!?!」

「……電話の先で叫ぶな」

美波は理音の冷たすぎる反応に声をあげると電話の先からは冷静な声で返事があり、

「もう少しあるでしょ。それなら、あそこに行ってみるとか? 昔話に花を咲かせるとか!?!」

「3年も前の事だぞ。それに昔話に花を咲かせるのはお前との共通の話があつてからこそだろ」

「だ、たとしても、何かあるでしょ。そうだ。理音の幼なじみにあつたよ。吉井明久って男の子と後は吉井から、『姫路瑞希』って女の子にも……」

「……美波、電話の先でなぜ、落ち込む?」

美波はこのままでは会話も何も無く、電話を切られてしまうと思いついて話題を振るが理音は別に美波と話するような事はないと言い切り、美波は理音の幼なじみの明久と『姫路瑞希』と出会ったと話すが瑞希の自分とは違い過ぎる胸の成長を思い出したようで声には宝がなくなつて行く。

「べ、別に落ち込んでなんかいないわよ!?!」

「そうか。どうせ、瑞希の成長しすぎた1部分と自分の貧相な1部分を比較しただけだろ」

「なんでわかるのよ!?!」

「図星か……そうか。瑞希は良く育っているようだ」

「あ、あんたは何を想像してるのよ!?!」

美波は落ち込んでなどいないと叫ぶと理音は美波の様子から瑞希の成長具合を推測したようであり、美波は理音の言葉に声を上げ、

「ん？ 瑞希の成長具合だ3年も会っていないがお前の反応から推測するに」

「推測何かしなくて良いわよ!?!」

理音は3年前の瑞希の容姿と美波の様子からリアルに瑞希の胸の成長具合を弾きだそうとするが美波は大声をあげて彼の思考を切り、

「だいたい、何で胸の話に持つて行くのよ？ 女の子に対して失礼でしょ。それに普通は吉井や瑞希が元気だったかって話になるんじゃないの?」

「意味がわからん。元気がどうかはその日の体調だ。俺が聞く理由がわからん。だいたい、アキはバカだから風邪などひかない」

美波は頬を膨らませながら、理音を怒鳴りつけるが理音は美波の反応の意味がわからずに首を傾げる。

第10問

(……まったく、理音ならもう少し優しい言葉をかけてくれるとか無いのかな?)

理音に電話をした翌日、美波は理音の電話での対応が気に入らなかつたようで、一人で機嫌が悪そうにしていると、

「島田さん、ちょっと良いかな?」

「ヨシい? ドウかしタ? ミズきも?」

明久と瑞希が美波の席に近づいてきて声をかけてきたため、美波は慌てて理音から貰った翻訳機を取り出す。

「週末って時間ある? おばさん……リオのお母さんに島田さんから、リオの話をしてあげてくれないかな? と思って」

「理音のお母さん? 理音は家族と連絡を取ってないの? 確かに日本には戻ってないとは言ってたけど」

「う、うん」

明久は美波に理音の事を彼の母親である『前田怜奈』に話して欲しいと頼みに来たようだが美波は明久の反応に何か違和感を覚えたようであり、疑問を口にするに明久と瑞希は気まずそうに美波から視線を逸らし、

「どっして?」

「そ、それは、リオはおばさんの事を誤解したままって言うか」

美波は2人の様子に首を傾げると明久は理音と怜奈の間にある確執を美波に話して良いのかと思ったようであり、

「……………理音、家族と仲悪いの？ お母さんと会って事はお父さんと仲悪い？」

「……………」

美波は明久の様子から理音は父親と仲が悪いと思ったようだが美波の言葉で明久と瑞希は目を伏せると、

「……………リオのお父さんは死んでるんだ。リオはそれを自分のせいだと思ってるから」

「そ、そうなの？」

明久は知りあつたばかりの美波に言っても良い事かを悩んだようだが覚悟を決めたようで美波に理音の父親の『海理』が死んだ事を教えると美波は驚きを隠せないようである。

「う、うん。それが理音が留学するきっかけになつたわけでもあるし……………」

「そうなんだ。私は別にかまわないけど」

明久はまだ美波に隠している事もありそうだが美波は明久と瑞希の様子から怜奈が悪い人ではないと言う事が理解できたようで頷くが

理音に内緒で怜奈と会う事は良くないこととも思っているようで歯切れが悪く、

「あ、あの。美波ちゃん、どうかしましたか？」

「うん。理音の知らないところでそんな事をしても良いのかな？
と思つて、今度、連絡とつた時にその事を話したら、理音の機嫌が悪くなりそうだし……あまり、家族の事って話したからなかったから」

美波は理音の気持ちも考えずにそんな事をしても良いのか考えているようで困つたように笑つたと明久と瑞希は美波の言い分もわかるように目を伏せるが、

「それでも、お願いできないかな？ おばさんとリオはケンカ別れみたいな感じなんだよ。おばさんはリオの事を心配してるけど、あんな別れ方をしたから、連絡何かできないと思つてるし。近況だけでも教えてあげられたらと思つんだよ」

「……わかつたわ。その代わりに、吉井が理音と連絡をとつた時にその事は話さないですよ」

明久はそれでも怜奈に理音の事を話して欲しいように真つ直ぐと美波を見ると美波は明久の様子に頷いた後にカバンからメモ帳を取り出して1ページを破り、明久に渡すと、

「これは？」

「理音の連絡先、昨日、欲しいって言つてたでしょ」

明久は美波の行動の意味がわからないように首をかしげ、美波は明久の様子に少しだけ呆れたようにため息を吐く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2421y/>

サドで邪悪な召喚獣 i f ~ another sky ~

2011年11月20日19時13分発行